

# 「台湾海峡は大丈夫か」か？ (2)

練馬区 板橋光紀

ー7月号(1)からの続きですー

1949年から今日迄、台湾では国共内戦で破れて大陸から逃げ込んで来た蒋介石とその部下達によって構成される中国国民党の事実上の一党支配が行われて来ている。これは、権威主義体制と呼ばれ、国民(本省人)はエリート(外省人)の決定を従順に受け入れることが要求され、政治的反対意見の表明や、エリートへの批判者は強力な警察、情報、治安当局によって厳しく弾圧されて来た。蒋介石の残した「人民に対して政治的自由は認めないが、政治に関与しない自由は許す」という有名な言葉が戦後40年間の台湾事情を象徴的に物語っている。

法的には、つい10年程前まで、40年の長きに亘って施行され続けていた戒厳令や党外(野党)結社の禁止措置、今尚存続している国会議員の過半数が国民党員とその親派から成る「万年議員」(非改選)によって占められていることと、その世襲制度等により、国民党政権が物理的に政権交代しないという、先進諸国の常識から考えると信じられないような非民主的なシステムが残っていることによって政治が硬直、改革のテンポが遅いことが問題の早期解決を妨げていると思われる。

1975年蒋介石が死去、1988年には後継の長男蔣経国が病死、本省人の李登輝が総統に就任する等、この頃から民主化への兆しが少しは見えて来る。時代の移り変わりと共に国民党政権は内外の圧力を慮って「分割払いの民主化」や「前方への逃走」と呼ばれる政策を図ってきた。「分割払い」とは圧力に抗し切れず、洪々と小出しに本省人の要求を受け入れる事で、党外結社の容認に代表される。どうせ近い将来受け入れなければならなくなる事柄であるならば、国民党自身の発案によって実現したかのように見せる為に、早めに市民に改革の宣言を出してしまおうとするのが「前方への逃走」で、長期戒厳令の解除がその良い例だ。いずれも政権を手放さない為の国民党の延命策と云える。

それにしても李登輝は本省人でありながら国民党員になっており、果敢に改革を断行しようとする姿勢に腰が引けているばかりか、多くの本省人、とりわけ台湾の経済界の人々がカリカリするようなパフォーマンスを連発しているのが我々部外者には理解に苦しむところだ。彼にもやはり本省人にあり勝ちなエリートへのコンプレックスの様なものがあるのだろうか。外省人のエリート意識にも困るが、本省人のひがみ根性も始末が悪い。

「中国」という呼称は「世界の中央」を意味する。ずいぶんおこがましい国名を付けたものだが、「中華」と呼ばされるともっと頭へ来る。「中」は黄河流域の漢民族の本拠地である「中原」を意味し、「華」の方は「文明」を表す。つまり漢民族が自分達の文化的先進性を周辺の蛮族に対して誇る時に用いられる。「中華」と相対的な蛮族への呼び名として「夷狄」が使われる。「狄」は万里の長城の外側に盤踞した匈奴を指す。匈奴には大きく分けて5つの部族があり、いずれも別称に「夷」けものへんが付いていることから、馬に乗って集団で中原を襲い、暴行略奪のかぎりを尽くして風のように去って行く「莽猛な野獣」と言う意味で、所詮人間として

扱った敬称ではない。

「夷」の方は未開人とか野蛮人を指すが、南方に住む人々を総称していたようだ。福建人と関係があると思われるので、少し歴史を振り返って解説する必要がある。

インドシナ半島でタイの人々に言わせると「ラオスの言葉は75%理解できて、カンボジア人の言葉は50%解る、そしてベトナム語は25%しか聞きとれない」と云う。つまりこれら4ヶ国の人々は根が同じで「タイ語族」と総称される。ちなみにビルマの言葉は全く解らない、ゼロ%だと云う。ビルマだけはインドの文化圏に入り、4ヶ国の人々から見ればアカの他人ということになる。「タイ語族」は別名を「越」と呼び、これら4ヶ国以外にも沢山の種族が存在したことから、「百越」とも呼ばれていた。紀元前の百越の勢力範囲は広大で、西は今の雲南省から貴州省、広西チワン族自治区に広東省、それに江西省、浙江省の一部と、当時秦の始皇帝が初めて中国を統一したと云っても華北と華中、それにせいぜい揚子江流域までで、華南地方の大部分は「閩越」が支配していたようだ。

今の福建省も当時は「閩越」と呼ばれ百越の一員ではあったが、「福建王国」の国名で独立国を形成し、他の百越とも中原の漢民族とも違った独自の文化を守っていた。百越はすべて仲がよいわけではなく、逆に各々は勢力拡大の為に近隣との戦争が絶えなかったようだ。2000年以上経った近代でも狭いインドシナ半島の中でビルマ、タイ、カンボジア、ベトナムの間で争いが絶えず、国土が大きくなったり小さくなったり、そしてラオスだけはベトナムの物になったりタイに隷属させられたりしている現実はその名残りとも云うか、稲作民族に共通した「械闘」又は「性」ではなからうか。

今のベトナムは「南越」ともよばれているが、紀元前の百越の中ではリーダー格と云うより、いじめっ子又はガキ大将的存在で、向こう気が強く、他の百越をいじめるだけでなく、北の漢民族とも度重ねて戦争していた。紀元前500年頃、漢と対峙する越の最前線は杭州を都とする浙江省で、漢側の最前線は水の都に蘇州城(今も大部分が残っている)を構える「呉」であった。この戦争は勝ったり負けたりで200年も続いていた。「呉越同舟」がここから発していることはよく知られている。

紀元前100年頃、項羽を敗った劉邦は秦を亡ぼして漢を建国。間もなく南越が閩越(福建王国)を急襲、支配して圧政を施した。

閩越は漢の武帝に助けを求め、漢はこれを好機と大軍を福建へ送る。南越を福建から追い払ったばかりでなく、追撃の手をゆるめずに華南全土を制覇、越軍を狭いインドシナ半島に押し込んでしまう。中国とベトナムが2000年前から犬猿の仲である理由はここにある。

華南地方南部一帯に今もなお越の文化を守って住み続けている多くの少数民族は2100年前に越軍に置きざりにされた百越の末裔である。新生中国ではこれらの少数民族に対し優遇税制を適用する等保護を与えている。多少うしろめたい気持ちがあるのかも知れない。広西チワン族自治区ではこれらの少数民